

第三回

琉球・中国交渉史に
関するシンポジウム

論文集



俞 玉儲 氏



金城 正篤 氏



吳 元豊 氏



劉 蘭青 氏



井上 秀雄 氏



徐 藝圃 氏



懇親会
一九九五年八月三日

守礼之門にて

第三回シンポジウム開催に際して

沖縄県教育委員会教育長 仲里 長和

本日、ここに「第三回琉球・中国交渉史に関するシンポジウム」を開催するにあたり、一言ごあいさつを申し上げます。

さて、御承知のとおり日本と中国の両国は、これまで隣国として長い友好の歴史をもっております。とりわけ我が沖縄県の場合は、一三九二年に琉球国中山王察度が建国まもない中国の明国の洪武帝の招諭を受け入れて中国に進貢してから、一八七九年の廢藩置県にいたるまで、五〇〇年余りにわたる国家間の正式の交流の歴史があります。その間、琉球は中国との進貢・冊封関係を通じて中国の高度に発達した文化を摂取・受容して、独特の王国として発展してきました。

本シンポジウムは、本県が推進しています『歴代宝案』の編集に寄与するため、一九九一年に正式調印された「清代の檔案マイクロフィルムの相互交換に関する中国第一歴史档案館と日本沖縄県教育委員会との覚書」に基づいて開催されるもので、過去二回的那覇市・北京市大会の成果を継承しておりますが、そのねらいは、日・中の研究者が特にテーマを明清時代における中国と沖縄の歴史資料に関する研究に限定し、日・中共同で、琉球と中国の歴史的關係について理解を深めることにあります。

本シンポジウムには、中国側から中国第一歴史档案馆館長徐藝圃先生を代表とする六名の先生方が御参加下さいました。また、県公文書館開館式典のために招聘されました中国档案学会理事長王明哲先生ほか二名の先生方が特別参加して下さいました。ここに心から歓迎の意を表する次第であります。さらに日本側からは、沖縄県歴代宝案編集委員会委員をはじめ数多くの先生方が御参加下さいました。その中から中国側から四名・日本側から二名の先生方が御発表下さいます。御発表をお引受け下さいました日・中国の先生方に対し、厚くお礼を申し上げます。

ところで、琉球・中国交渉史に関しては、過去二回の本シンポジウムを含めて多くの日・中の研究者の御努力によってその全容がかなり明らかになっております。しかしながら細部につきましては、必ずしも十分とはいえない面があります。本日、日・中の研究者が一堂に会し、それぞれの御専門のお立場から琉球・中国交渉史についての共通理解を深められることは、日・中の学术交流を促進する上で誠に画期的なことであり、また極めて有意義なことだと考えております。どうか、この機会にじっくり討論を重ねられ、本シンポジウムが多大の成果を収められま

すよう御祈念申し上げます、あいさつといたします。

一九九五（平成七）年八月三日